

リンゲルマン効果

第80回体育祭から1週間が過ぎました。体育祭実行委員を中心として生徒の力で創り上げた体育祭は素晴らしいものでした。この体育祭の成果と課題を、各学年・学級・委員会などでしっかりと検証し、日々の学校生活や学校行事につなげてほしいと考えています。この後すぐの中間テストを乗り切ると、3年生は修学旅行に出発です。

小学校の時の運動会では「綱引き」があったと思います。富士見中学校でも昨年度までは競技種目の1つに綱引きがありました。誰もが経験していると思います。この綱引きを、1人で行った場合に100%の力を発揮したとします。では、2人で行った場合、1人1人は100%の力を発揮できるのでしょうか？1人当たりの力は93%に減少してしまうのだそうです。5人の場合は70%に、8人の場合は49%まで減少してしまいます。これは、今から100年も前にドイツの心理学者リンゲルマンが行った実験で明らかになったものなのです。この実験から、集団で作業を行う場合、メンバーの人数が増えれば増える程1人当たりの貢献度が低下するという現象が確認され、人が増えると無意識に手を抜くこの心理現象が「リンゲルマン効果」と言われるようになりました。「自分が頑張らなくても誰かがやるだろう」「自分ひとりぐらい」という群集心理が働き、人数分だけ責任感が拡散すると言われていています。

同様の実験を100年後の現在で行っても結果は変わらないようです。それでも例外はあるといます。綱引き競技の専門家である日本綱引き連盟のチームが同様の実験を行った場合には、1人1人はおよそ100%の力を発揮するのだそうです。100%の力を発揮するポイントは、目的に向かって、一人一人が何をすべきなのかが明確であるということです。自分の役割に自覚と責任を持つことです。綱引きでいえば、掛け声に合わせて一瞬で力を終結させること、ポジションによって綱の握り方や綱を引く体勢を変えることなどが該当するのでしょうか。何よりも、「自分がいなければ」「自分がやらなければ」という意識をもって、取り組むことが重要なのだと思います。

先日の体育祭で、「リンゲルマン効果」に陥っていた学級はなかったでしょうか。学校生活でも同様です。授業の中でのグループ活動、学級における給食の準備や清掃活動なども、このような視点から見直す必要があるのではないのでしょうか。部活動ももちろんそうですね。1人1人が100%の力を発揮できる集団をみんなで創っていきましょう。以上で、6月全校朝会のお話を終わりにします。